ブルーノ・タウトと煉瓦

――その意識化の契機――

蜷　川　順　子

Bruno Taut and the Brick:

His Motives of its Awareness

NINAGAWA Junko

In his book *Japanese Houses and Lives,* Bruno Taut discusses how the Japanese *daiku* (carpenter) is comparable with the Western mason (which is sometimes translated as wall workers in Japan), an artisan ferro-concrete who builds houses and other structures. However, when Taut arrived in Japan in 1933, he was sometimes introduced to people as a kind of *sakan* (plasterer). This might be one reason why few people hired him to do construction work during his stay in Japan. The misunderstanding of his profession was caused by a difference in the construction traditions of Japan and the West. Generally speaking, the Western mason builds by piling up bricks, while the Japanese carpenter builds by erecting pillars and putting a roof on top of them.

Taut enrolled in the *Königliche Baugewerksschule* (the Royal School for Professional Construction) and graduated in March 1901 with excellent grades. The school's name had various translations into Japanese, which caused confusion when it came to understanding the kind of work its graduates did. Construction work was traditionally done by professional people trained in private workshops. The school's system for construction was then rather new both in Europe (where it started around the beginning of the nineteenth century) and in Japan (where it started in the third quarter of the century).

Taut wrote in his Vitae (the book referred to above) that he had graduated in 1902. It is not known why he claimed to have graduated a year later than he actually did. Was it just a mistake, or did he think of his activities in Hamburg and

Wiesbaden in 1902 as merely a trial run? These cities were renowned as places where "brick expressionism" in architecture—which was derived from the new medievalism of the nineteenth century—had flourished.

In 1903, Taut began working in the Berlin office of Bruno Möhring, a specialist in the new building methods that combined steel and masonry and used them in ephemeral, eye-catching designs for exhibition pavilions. During that year, Taut often went to Chorin, a town which had the ruins of an old cloister that stood near a lake and that had been built using medieval masonry techniques, and this derelict structure might have given him new ideas for the use of bricks. In his well-known Glass Pavilion (1914) he used not only glass and steel effectively but also masonry materials like brick and tiles, items whose cubic forms resonated with the Jugentstil (modern style) designs and the currents of Cubism like those seen in Robert Delaunay's Orphism. Brick was a material that always stimulated Taut and that he periodically abandoned but then returned to.

キーワード：ブルーノ・タウト（Bruno Taut）、ケーニヒスベルク（Königsberg）、コーリン（Chorin）、煉瓦（bricks）

1933 年 5 月 3 日に敦賀港に到着したドイツの建築家ブルーノ・タウト（Bruno Taut, 1880-1938）は、ドイツの全政権を掌握しつつあったナチスから逃れて事実上日本に亡命した。1936 年 10 月 15 日に下関港から離日するまでの 3 年半あまりの日本滞在中は、自嘲気味に「建築家の休日」[1]と述べているように建築家としての仕事は少なく、もっぱら講演・著述や、工芸に関わる活動をおこなった[2]。そのような中、代表的著作『日本の家屋と生活』で日本の大工に言及した際、建設工事を統括するその役割に匹敵するのは、全世界の古典建築においては「石工や煉瓦工」、現代では「鉄筋コンクリート技師」だと述べている[3]。

そのタウトが「初め煉瓦職工として建築技術の実地修業を積んだ」[4]のは、生地ケーニヒスベルクの王立建築職学校（Königliche Baugewerksschule）入学に先立つ時期で、同校でも

1）田中 2012, 158.

2）「ブルーノ・タウト年譜－ブルーノ・タウト自身による 1936 年の履歴書より」展覧会図録 1994, 38-40；長谷川 2017, 610-15.

3）タウト 2008 b, 227.

4）タウトを招いた日本インターナショナル建築会発行の『インターナショナル建築』1933 年 5 月号編集部は「煉瓦職工」と表現した。タウト 1933, 17. 蔵田 1933, 193 は壁工（或いは左官）としたが、蔵田 1942, 13 では「現場の監督のやうな役」となっているので、来日当初の情報が修正されたことがわかる。ただし蔵田は、タウトの構築的な思考は、タウトが 1903-4 年に師事した同郷のブルーノ・メーリンク（Bruno Möhring, 1863-1929）の元で培われたとみなした。蔵田 1942, 17-19. タウトが学んだ内容に近いものは Roloff 1947 をみよ。

Maurerlehre で卒業資格を得ている[5]。このドイツ語を直訳すると「壁学」になるが、来日時には「左官」を学んだ人物として紹介されることもあった。日本で「土壁・漆喰塗り」[6]職人に用いられるこの職名は、タウトが自ら学び、建物の構造に関わると認識していた煉瓦積工とは異なるものである。この違いは、壁体を主体とする西欧建築と柱を主体とする日本建築とは基本構造が異なるという一般論を顧みない誤解に由来するものであろう。

その一方でタウトは、マクデブルクの色彩建築[7]に代表されるような、壁の表面の活性化に強い関心を示し、「塗る」という行為の点では左官に通じる活動もおこなった。また、鉄骨の登場によって壁体に対する考え方も変化し、コルビュジェ（Le Corbusier, 本名 Charles-Édouard Jeanneret-Gris, 1887-1965）の登場とほぼ期を一にして、鉄のモニュメント（1911）［図 1］やグラス・ハウス（1914）［図 2］など、鉄骨を用いた実験的なパビリオン制作もすすめた[8]。

しかしながらタウトは、彼がグラス・ハウスの土台に用いた斬新なタイルあるいは煉瓦使用［図 3］[9]からもわかるように、煉瓦積工として学んだ基礎をおそらく何らかの形で応用、発展させた。この問題は従来ほとんど注目されることがなかったが、タウトの作品や生涯を概観するなら、煉瓦あるいはそれに類する素材は－陶芸も含めて－常に彼の傍らにあった。本稿はそのようなタウトと煉瓦との関係を考察し始める手がかりとして、テオドール・フィッシャー（Theodor Fischer, 1862-1938）に師事することで活動内容を変化させる 1904 年頃までの初期に絞り、タウトが煉瓦を意識するようになった契機の掘りおこしをめざす。

第 1 章では、生地ケーニヒスベルクにおけるタウトの体験の中に、煉瓦を意識した契機を探

5）Speidel 2013. 2022 年 10 月 20 日確認．この学校名を田中 2012, 16 は「国立建築工学校」、篠田 2008,「高等建築専門学校」、展覧会図録 1994, 38,「建築工芸学校」、長谷川 2017, 615 は「土木建築学校」と訳している。ここでは、Bauhochschulen（建築高等専門学校）や Bautechnischen Hochschulen（建築工学高等専門学校）とは区別し、また後述するように、ミュンヘンのドイツ初の同種の学校では、地域に根ざした「土木」（Bauwesen）が前面に謳われたが校名は変わらなかったので、同校にゼルゲル 2003, 401 が用いた「建築職学校」という訳語を採用した。ちなみに同書では Maurer の訳語に「左官」が採用されている。さらに staatlich（国立あるいは州立）、provinziell（地方の）、städtisch（市立）、private（私立）など、資金源が異なる多くの建築学校が存在したため、ここでは王立（国立とほぼ同義だが）を採用した。Königliche Baugewerksschule: https://de.wikipedia.org/wiki/Königliche Baugewerksschule（2022 年 10 月 10 日確認）

6）『建築大辞典』2007, 625.

7）蜷川 2022, 136-39.

8）タウトは、1903 年にドイツ化粧貼石材・テラコッタ製品連盟設計コンペに応募し、新壁材にも関心があったことがわかる。長谷川 2017, 615.

9）ティーエケッター 1994, 136-43；蜷川 2022, 136.

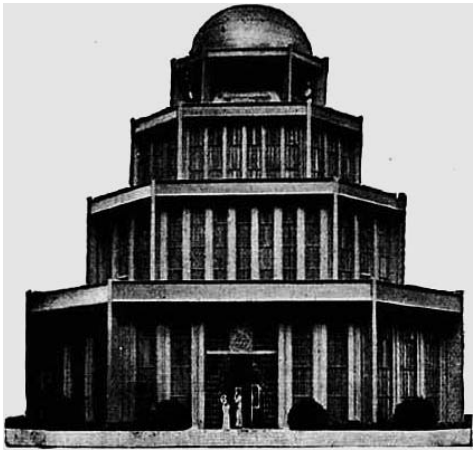

図１　ブルーノ・タウトとフリッツ・ホフマン《鉄のモニュメント、ドイツ製鉄所連盟ならびに橋梁鉄道建設連合会の広告用パビリオン》1913 年ライプツィヒ国際建築博覧会、1912 年、Public Domain.

図２　タウト、グラスハウス・パビリオン、ケルン工作連盟博覧会、1914 年、Public Domain

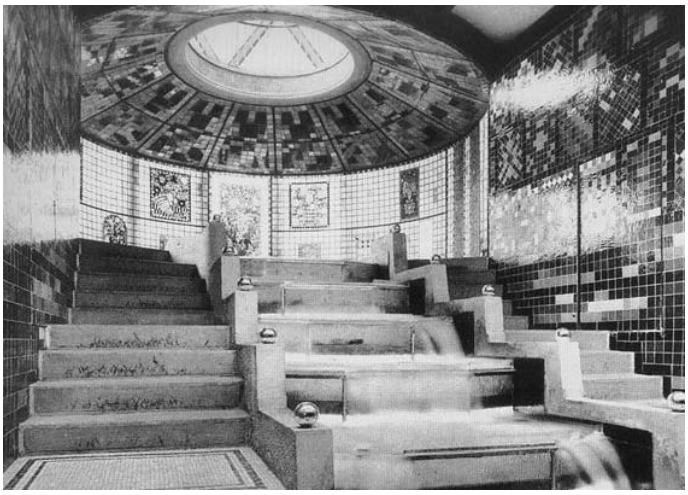

図３　タウト、グラスハウス・パビリオン（内装）、ケルン工作連盟博覧会、1914 年、Public Domain

る。第２章では、手工業ギルドから近代的学校制度への移行期に設立された比較的歴史が浅い、しかしながら進取の気風が感じられる王立建築職学校の教育内容をタウト在学中に絞って詳述し、煉瓦積工の資格を得た建築職の出発点に思いを巡らせる。第３章では、進路に関して迷いがあったタウトにとって思索の地であったコリーン湖（現在：アムツゼー）畔が、広い意味でのロマン主義者であった新古典主義の建築家シンケルによって「煉瓦」中世主義[10]の拠点

10）煉瓦ゴシック（Backsteingotik）や煉瓦表現主義（Backsteinexpressionismus）という用語は、　↗

のひとつとして開発された場所であることから、タウトに作用した契機のルーツをシンケルの活動に探る。第4章では、コリーン修道院の保存修復を促した19世紀の「煉瓦」中世主義に触れ、ロマン主義的歴史主義によって醸成された美意識が、タウトを通して近代的な「煉瓦」表現主義へと展開した可能性を示して本稿の結びとする。

1　ブルーノ・タウトとケーニヒスベルク[11)]

(1) ケーニヒスベルク略史

タウトが生まれたケーニヒスベルクは、バルト海南東部にあるザムラント半島南のプレーゲル川河口に、1255年にドイツ騎士団によって建設された、スラヴ他諸民族に対する要塞から発展した都市である[12)]。川に沿って作られたアルトシュタット、クナイプホーフ、レーベニヒトという3つの市街がケーニヒスベルクの主要部分を形成した。川の中州におかれたクナイプホーフには、1333年から80年にかけて、聖母とプラハのアダルベルト（St. Adalbert, c.955-97）に献堂された煉瓦造の大聖堂［図4］が建設されたが、これはドイツ騎士団国に属していなかったザムラント司教管区の司教教会であった[13)]。

図4　歴史的ルーテル聖堂、2017年（修復後）、カリーニングラード、A. Savin, WikiCommons.

↘近年展覧会などで用いられている。たとえば2004年10月にヴィスマルで開催された『煉瓦ゴシックへの道 Wege zur Backsteingotik』展などがある。ここでは、一般的用語に限定的に「煉瓦」を冠したという意味で「」を付して用いる。

11）中世後期以来東プロイセンの中心地であったが、第二次世界大戦で陥落し、1945年のポツダム宣言でソビエト連邦に併合された。ドイツ人が追放され、入植したロシア人によって最終的にカリーニングラードと改称された。田中 2012, 18-19.

12）同地には、スラヴ系のプルーセン（プロイセンの名称が由来）族の砦などがあったが破壊され、コニングスベルク（ケーニヒスベルクの名称が由来）という新しい要塞が建設された「王の山」を意味する名前は、建設費を払ったボヘミア王オタカル2世（Přemysl Otakar II, 1230?-78）に敬意を表したものである。稲野 2015, 62.　スラヴ民族における位置づけの一例は、『〈スラヴ叙事詩〉通鑑』2015, 28.

13）アダルベルトはボヘミア貴族スラブニク家出身の殉教聖人。対立貴族の妨害でチェコの宣教に挫折し、プロイセンのキリスト教化に勉めた。大聖堂建設史、管轄の変遷、建設資材の地元からの調達などについては、Voigt 1832, *etc.* 司教の動きに対抗して、1348年にリトアニアに対するストレヴァの戦いで勝利したドイツ騎士団団長は、同市にシトー会の修道院を設立した。Christiansen 1997, 287.　ドイツ騎士団とポーランドに支援されたプロイセン同盟の軋轢と宗教上の問題については、渡辺 2020, 53-57（小山哲著）. 58-63（福嶋千穂著）.

宗教改革時の1523年にルター派の説教がなされて以後はプロテスタントの教会となり、1544年に近くに創設されたケーニヒスベルク（アルベルトゥス）大学の大学附属聖堂になった[14]。

17世紀のプロイセンは、中世来の選帝侯とその抵抗勢力であるプロイセン貴族との攻防、三十年戦争、周辺のポーランドやスウェーデンとの軋轢により、複雑な歴史を織りなす。18世紀初頭にはプロイセン王国となるが、ケーニヒスベルクは疫病で衰え、1758年には一時的にロシアに併合された。1806年にナポレオン（Napoléon Bonaparte, 1769-1821）に破れたプロイセン政府はケーニヒスベルクに逃れて、同市はナポレオンへの政治的抵抗の中心地となった[15]。ナポレオン戦争が終わり、ウィーン会議がおこなわれた頃、広範囲にわたるプロイセン東部鉄道が諸都市を結び、1860年にはベルリンとサンクトペテルブルクが鉄道で結ばれ、バルト海で周航していた汽船と共に同地の経済を発達させた[16]。

少年タウトの環境にあったのは、中世来の煉瓦造りの大聖堂やその他の古い建造物と戦争に起因するその廃墟、および市中にあった19世紀の近代化を象徴する鉄道の中継地であった。文化的には、ナポレオンへの抵抗が生みだしたロマン主義や民族主義があったかもしれない。タウトの幼少期はほとんど知られていないが、クナイプホーフの大聖堂の南側に建てられていたギムナジウムに通っていた時代に、建築家への道を進むことに決めたのではないかと推察されている。

(2) クナイプホーフ・ギムナジウム

商人であったタウトの父方の祖父は製粉業者で、母方の祖父は農民であった[17]。タウトは、後にナチスに退廃芸術の烙印を押される芸術家たちと接触があり、またモスクワを訪れてナチスに目を付けられたためユダヤ人として紹介されることもあったが、蔵田によれば、本人はそれを否定し、先祖はドイツ騎士団の騎士だとして家系図を見せられたことがあるという[18]。

タウトの父の商売は思わしくなく、潤沢な家計ではなかった。それでも、ケーニヒスベルクでもっとも由緒あるギムナジウムに入学できたことは、タウトの利発さを物語るものであろう。在籍中は数学に秀でていたことが伝えられている[19]。

14）田中 2012, 13-14；蔵田 1933, 11-13.

15）渡辺 2020, 64-70（福嶋千穂著），85-91（白木太一著）.

16）蔵田 1942, 11-13. その後、第一次世界大戦の勃発で敗北したドイツでは、1918年にプロイセン王国が終焉を迎え、ヴァイマル共和国プロイセン自由州が作られた。ケーニヒスベルクと東プロイセンは、ポーランド回廊部分の割譲により、ヴァイマル・ドイツ本土と切り離されることになる。

17）Speidel 2013, 814.

18）蔵田 1942, 12；篠田 2008, 162-63; Eichhorn 2014.

19）篠田 2008, 162-63；田中 2012, 12-13.

図５　クナイプホーフのギムナジウム、魚市場からみた対岸の大聖堂とギムナジウムの建物、Public Domain.

このギムナジウムは、大聖堂ギムナジウムあるいは大聖堂学校とも呼ばれ、東プロイセンでもっとも古い学校であった。聖堂学校は 1304 年にはじめて *schola cathedralis* としてその存在が言及されているが、宗教改革の最中の 1534 年に福音派の学校になり、1560 年には大聖堂の南側に移転した。フランス革命の余波が及んだ 1810 年には高等市民学校になり、ナポレオン失脚後の 1831 年 11 月に、ケーニヒスベルクの学校教育計画の枠組みで、大学入学資格試験を備えた人文主義的ギムナジウムになった。

1862 年には、ケーニヒスベルク大学移転により空き地になったクナイプホーフの北東に新学舎［図 5］が建てられた[20]。タウトが通っていたのはこの新学舎であるが、第二次世界大戦中 1944 年 8 月 29-30 日の爆撃で完全に焼失し、一時的に使用可能な建物に移ったが、1945 年 1 月 23 日に完全に閉鎖された。

ギムナジウム時代のことはあまり知られていないが、すでに述べた成績優秀で数学に秀でていたことに加えて、頻繁に言及されるエピソードがある。それは、アルトシュタットの教会裏手にあった、ケーニヒスベルク大学出身の哲学者カント（Immanuel Kant, 1724-1804）の記念碑［図 6］に通学途上日常的に接し、そこに記されていた『実践理性批判』からの引用句「輝

20）1923 年 1 月 6 日にアルトシュタット・ギムナジウムとの統合により、アルトシュタット・クナイプホーフ市立ギムナジウムになった。まれに、タウトの経歴に統合されたギムナジウムが挙げられること（蔵田 1942, 13）があるが、タウトが通っていたのは統合前の学校である。Wiese 1864, 54 f. Kneiphöfisches Gymnasium. https://de-academic.com/dic.nsf/dewiki/780222; https://de.wikipedia.org/wiki/Kneiphöfisches_Gymnasium 2022 年 10 月 12 日確認

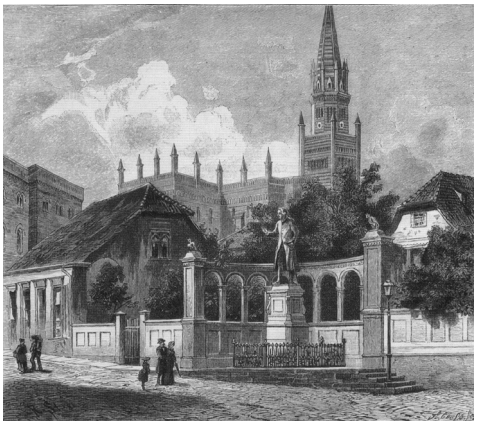

図６　作者不詳《アルトシュタットの教会の背後にあるカントの祈念碑》19世紀前半、Public Domain.

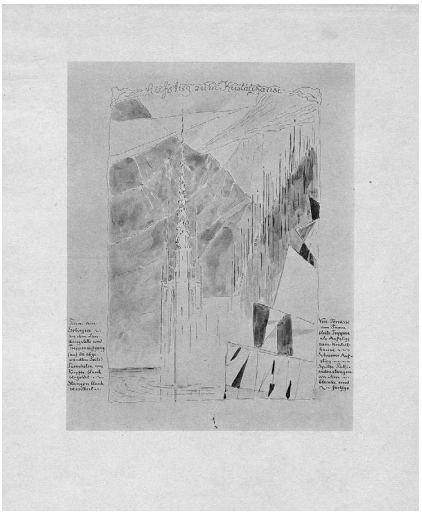

図７　タウト、《水晶宮》第１図、詩画集『アルプス建築』1917年、1919年出版、Hagen: Folkwang-Verl. ハイデルベルク大学図書館、オンライン・リソース、Public Domain.

ける大空はわが上に、道徳的規範はわがうちに」を生涯忘れなかったことである[21]。さらに、カントの唱えた「恒久平和」に感銘を受け、これが第一次世界大戦中の反戦活動や詩画集『アルプス建築』［図７］制作をすすめた理念を形成したものと思われる[22]。

教育内容に関しては、たとえばアレンシュタイン王立ギムナジウムの1897/98年の年報によると、英独仏はもとよりギリシャ語やラテン語などの語学、文学、歴史、地理などの修得時間数の表があり、中でも注目されるのはユダヤ教やヘブライ語の時間も設けられていることである[23]。ケーニヒスベルクはハンザ都市であったころから東プロイセンの経済の中心でユダヤ人も多かった。後に1938年１月９日の夜、ナチス政権下のドイツ全土における反ユダヤの暴動で、破壊されたガラス片が舞うことから「水晶の夜」と呼ばれる惨劇が同市でも起こったことを考えると、隔世の感がある[24]。タウトが学んだのは、高水準の人文主義的教養を備えた若者の育成をめざす高等学校だったのである。

21）田中 2012, 14-15；タウト 1975；長谷川 2017, 688（カントとの関係）. 686-87（カント研究者で、タウトの信頼も厚く、彼の著書や講演の翻訳をおこなった篠田英雄との関係）。

22）蜷川 2022, 130-32. 『アルプス建築』に認められる「恒久平和」の理念については、日土タウト研究会（代表：環境都市工学部建築学科橋寺知子）のメンバー、西田兼（島根大学法文学部）の論考が待たれる。

23）Sieoka 1898, 2-5.

24）田中 2012, 16-19.

ギムナジウムの卒業生の半数近くが進学した中で、タウトはアビトゥーア（大学受験資格）を得ていたが、需要が見込まれ比較的安定した建築関係の仕事に就くために、1897 年 17 歳で地元の煉瓦積親方[25]グートツァイトの工房に入った[26]。このことに関して、将来上級学校に進学するつもりだったが家計を考えて就職したという説[27]や、ケーニヒスベルクの王立建築職学校は、入学前 2 年間の実務経験を要件としていたという説[28]がある。いずれにしても、1898 年にはケーニヒスベルク王立建築職学校[29]に入学した。

2　王立建築職学校

ドイツにおける建築職学校は 1820 年代から 19 世紀を通して、建築職教育のために各都市に作られた。王立の建築職学校は 1821 年に初めてミュンヘンで始動した。ミュンヘンでは 1803/04 年にすでに、職業学校で建築職に特化した授業がおこなわれていた。その他にもドイツ各地において、専門学校で建築家養成に必要な科目を揃えて、20 世紀前半までに高等専門学校（工業大学）や大学の建築学科に発展するところもあった。

ヨーロッパ規模でみた場合、啓蒙主義や産業革命の広がり、および戦闘と破壊の拡大に伴い、手工的建設に科学的根拠を与えて、その実践を強化しようとする傾向が強まっていた。こうした理工高等教育は、1794 年のパリに作られたエコール・ポリテクニーク（通称イックソス、理工科学校）や 1799 年のベルリン建築アカデミーによって先導された。

(1) ミュンヘンの王立建築職学校

ミュンヘンでは、1820 年 11 月に手工的建築職への就業希望者が増えていたので、ナポレオン戦争で中断されていた建築職の授業を、1821 年に職業学校の素描講師ヘルマン・ミッテラー（Hermann Mitterer, 1762-1829）が再開した。これに基づいて 1823 年には王室造営物総監グスタフ・フォアヘル（Gustav Vorherr, 1778-1847）の指揮で、独自の建築職学校が創設された。まもなく王国の保護が得られ、近代的で地域的な必要性に基づく土木事業を前面に打ち

25）第二次世界大戦後に制度化された現行のマイスター制度と原語やルーツを同じくするが、ここでは中世以来の手工業ギルド（ツンフト）の流れをくむ有資格の職長名マイスター（独）、メートル（仏）、マスター（英）に対応する訳語として「親方」を用いる。

26）コンクリート及び鉄筋コンクリート建築を専門とする株式会社フィリアーレの支店でもあった。展覧会図録 1994, 38.

27）蔵田 1942, 13.

28）篠田 2008, 163; Speidel 2013, 814 は、この期間を在学期間に含めている。

29）訳語は、注 5 をみよ。

だした、国際的な建築界の最前線の水準に基づく、高度な内容の統一的修得が目指されたのである。

第一次世界大戦後、ヘルマン・ゼルゲル（Herman Sörgel, 1885-1952）は『建築美学』（1921年）においてバイエルンを例にとり、建築の実際的、商業的、芸術的諸要求に基づき、関係教育機関に対して規範を与えるために、建築経営に必要な専門家を3つの大きな群に分類して、それぞれに対応する学校を提案した。それが1）建築職学校、2）建築中等学校、3）建築大学校である。ここで関係するのは建築職学校だが、この学校は建築業の親方の養成を目的とし、経験を積んだ親方の陪席の下、6ヶ月の冬コースを2回消化したあと、親方資格試験がおこなわれる。親方の称号を与える権限は独占的にこの学校群に与えられていた。この書ではカリキュラム表の例が示され、構築論（週20時間）の煉瓦積の仕事として、煉瓦組積、煉瓦壁積、粘土建築方式、壁体開口、自然石の壁が挙げられている。彼は中世の建築職人組合のように、そこからすべてが生じる唯一の学校など、現代の錯綜した建築事業では無意味であるとして、絵画や彫刻など手工的活動を組み合わせるバウハウス的傾向に批判的であった[30]。

（2）中世主義と煉瓦

最初の建築職学校が創設されて、ゼルゲルが『建築美学』を著わすまでのおよそ1世紀のあいだにドイツ各地で多くの改革がなされた。とくに地域に根ざした土木事業のために、監督行政機関によりさまざまな規定が制定された。その一方で、ナポレオン戦争以降はロマン主義的な中世主義が強まり、その中からバウハウスのような発想も生まれていた。

北ドイツでは、伝統的なハーフティンバー（木材）が廃れ、新しい建築資材として煉瓦の応用が強化された。1831年にフリードリヒ・ルートウィヒ・ハールマン（Friedrich Ludwig Haarmann, 1798-1864）がホルツミンデンに、公国初の建築職学校を建設し、建築活動が減少する冬の間に、建築資材、建築構造、建築史、形態および建築様式学、素描、建設技法を教えた。ホルツミンデンを手本にして、北ドイツにさらに多くの建築職学校が設立され、寄宿舎を備えるところも少なくなかった[31]。

19世紀の中世主義を代表するもっとも重要な建築指導者は、1849年から1878年にかけてハノーヴァーの理工専門学校（ポリテクニクム）の建築学教授で、ハノーヴァーの建築家養成学校（Architekturschule）を創設したコンラート・ヴィルヘルム・ハーゼ（Conrad Wilhelm Hase, 1818-1902）である。彼は中世のゴシック煉瓦建築からその形態レパートリーを引きだ

30）ゼルゲル 2003, 396-403.

31）Zimmermann 1904. 690-92.

図８　ケーニヒスベルク建築職学校25周年記念誌、表紙、ベルリン州立図書館、Public Domain.

し、ハノーヴァー派を形成した。ハーゼの学生たちの多くは、建築職学校の教員になり、ハノーヴァー派の「プログラム」を広めた[32]。

(3) ケーニヒスベルクの王立建築職学校

ケーニヒスベルクの王立建築職学校は1892年に設立され、25周年を迎えた1917年に記念誌［図8］[33]を発行している。第二次世界大戦末の1944年に学舎が完全に破壊され、1945年には閉校となった。ロシア領となった現在は、ケーニヒスベルク市は存在しない。それでも記念誌や年次報告などわずかながら資料が残されていることは幸運というべきかもしれない。

1870年代から東プロイセンではさまざまな形で職業学校制度が模索されていた。1877年2月26日には政府の後押しで、職業学校や建築職学校や工科親方資格学校が設立されたが、制度上の問題で良い結果を生まずに頓挫した。建築工を求める声は強かったが、十分な養成ができないため、希望者は中部ドイツの私立の建築職学校を探さなければならない状態だった。1880年に地方の実業学校を建築職学校にする試みがあったが、この計画も内部分裂のため挫折した。1882年に作られた市立実業学校で、建築職のための教育が始まり人気があったが、市の財政難でさらなる発展を望むことはできなかった。このころから、東プロイセンに本格的な建築職学校の建設を求める声が高まり、州政府が州立建築職学校を設立し、1891年に1000人を超える学生が集まった。続いて、1891年秋にポーゼン、1892年にケーニヒスベルクに王立建築職学校が設立された[34]。

9月26日に任命された学校長が10月初めに赴任し、11月8日に4クラス71名の学生と6名の教員でスタートした。年を追う毎に学生数が増え、学舎拡張や移転がおこなわれ、1897

32）たとえば、中世の建築職人組合の実践から、三角測量の学を見直した。ゼルゲル 2003, 238-39; Kokkelink 1998. またヨーロッパの煉瓦積については、深尾 2022, 134-43. 19世紀の民族主義的運動については、Siedler 2019 a, 20-23.

33）*Festschrift zum 25 jährigen Bestehen der kgl. Baugewerkschule Königsberg i. Pr. 1892-1917*［以下、Festschrift と略］, 1917.

34）Chihak 1917, 3-5.

年には新学舎に移っていた。翌 1898/99 年冬学期にタウトは入学したが、そのときの新入生は 10 クラス 227 名であった[35]。

記念誌には実務科目の一覧はないが、学校長や教員の職掌や出身地が掲載されている[36]。タウトは、デュッセルドルフの職業学校理事だったベルリンの建築家ヴィルヘルム・ハウプト（Wilhelm Haupt、赴任 1892 年 10 月－1902 年 10 月）、シュテティーン出身のケーニヒスベルクの建築家カール・ヴァグネル（Karl Wagner、赴任 1892 年 10 月－1898 年 10 月）やウィーンの帝室美術工芸博物館補佐だった数学者エミル・ミュラー（Emil Müller）などと接触があったと思われる。1897/98 年には補助教員としてハノーヴァーの建築家ゲオルク・キュスター（Georg Küster）の名前がある。彼がハノーヴァー派と関係していたかどうか不明であるが、ハーゼが提唱した「煉瓦」中世主義を学生に語ったかもしれない。補助教員は学生の増加に伴い 1893/94 年からおかれるようになった。卒業委員会の委員には、建築職親方たちの中に煉瓦積親方ヤコビ（Jacobi）の名前をみることができ、理事のメンバーにも市の推薦で煉瓦積親方シトニット（Szitnid）が含まれている[37]。実際の煉瓦積親方が、学校運営や評価に発言権をもっていたことがわかる[38]。

タウトは来日したときの履歴書に、1902 年に卒業試験に優秀な成績で合格したと書いているが[39]、実際は 1901 年 3 月のことである。このときの合格者は 33 名、入学者の約 15 パーセントに過ぎない。タウトを含めて卒業後の略歴［図 9］が記されている合格者もいて、おそらく本人が記念誌編集までの消息を寄せたのであろう。この学校では 1894 年に最初の卒業試験が行われ、卒業制作展が開かれたという記述があるので、タウトも卒業作品を制作したと思われるが残されていない。この学校で取得できる資格は他では得られないものだが限られていたため、さらなる可能性をめざして、後の 1908 年にベルリンのシャルロッテンブルク工科大学[40]に通ったものと思われる。

35）Kell 1917, 7.

36）Kell 1917, 8-10.

37）Kell 1917, 10.

38）詳細なカリキュラムについては、*Programm, Nachrichten und Lehrplan der Königlichen Baugewerkschule zu Königsberg i. Pr. für d. Schuljahr 1895-1901*, 1901. これは別稿で扱う予定である。

39）「ブルーノ・タウト年譜－ブルーノ・タウト自身による 1936 年の履歴書より」展覧会図録 1994, 38. この年譜には、マンフレッド・シュパイデルの注釈により、実際は 1901 年の合格だったことが記されている。しかしながら、タウトの多くの評伝では 1902 年の卒業になっている。1902 年までの活動は、タウトにとってインターン的な大学に帰属する活動だったと考えられたのかもしれないが、そのことは確認できない。

40）展覧会図録 1994, 38.

Nr. d. Buchregisters	Name, erlerntes Handwerk, Geburtsort und Kreis Anschrift, Werdegang und jetzige Lebensstellung
204	**Woitkovitz,** Fritz, Z., Angerburg. Zimmermeister in Angerburg.
	März 1901.
205	**Albrecht,** Rich., gut b., M., Insterburg.
206	**Bergmann,** Adolf, M., Burdungen, Neidenburg. Maurermeister in Pr.-Friedland Westpr. Arbeitet zuerst bei der Firma Gebr. Bergmann an städtischen und ländlichen Gebäuden im Maurer- und Zimmergeschäft mit Tischlerei und Dampfsägewerk, macht sich am 1. 10 1903 selbständig, baute mehrere Geschäftshäuser und als Unternehmer das Jagdschloß Sr. Kgl. Hoheit des Prinzen Friedrich Leopold von Preußen in Kusan.
207	**Brandstädter,** Wilh., gut b., M., Gindwillen, Ragnit.
208	**Claas,** Henry, Z., Memel.
209	**Dietrich,** Walter, M., Elbing. Angebl. Stadtbaumeister in Eydtkuhnen.
210	**Gawlik,** Wilhelm, Z., Gutenfeld, Königsberg.
211	**Glang,** Paul, M., Gr.-Lindenau, Königsberg. Stadtbauführer in Düren im Rheinlande, Eschstr. 25. Arbeitet zuerst als Supernumerar bei der Kgl. Regierung in Kbg., seit 1905 als Kgl. Bausekretär, seit 1908 als Stadtbauführer in Düren. Wurde verwendet a) in Ostpreußen im Staatsdienst, beim Bau eines Wohnhauses in Bartenstein, einer Kirche in Siegfriedswalde, Seminar in Memel, für die Wohnungsbaugenossenschaft in Bartenstein und verschiedener Schulhaus-Neu- und Umbauten, b) in Düren beim Bau des Theaters, Krankenhauses, Wasserturm, Wasserüberlauf und Leuchtfontäne, Seminar, verschiedenen Wohnhäusern, Turnhalle, bei der Baupolizei und der Wohnungspflege.
212	**Hagner,** Waldemar, Z., Heilsberg, ✠ a. d. Felde d. Ehre gef.
213	**Hesse,** Arthur, M., Königsberg Pr., ✠ a. d. Felde d. Ehre gef.
214	**Jandt,** Albert, M., Königsberg Pr.
215	**Kalweit,** Christoph, Z., Gudellen, Stallupönen. Angebl. Regierungs-Bausekretär in Hannover.
216	**Karnke,** Kurt, Z., Schneidemühl.
217	**Klein,** Paul, Z., Königsberg Pr. Königsberg, Kaiserstr. 31. Arbeitet zuerst beim Magistrat in Kbg. und bei Baurat Heilmann als Bauführer, seit Nov. 1903 selbständig. Macht bedeutende Studienreisen, beteiligt sich an verschiedenen Wettbewerben. Baut ca. 60 Wohn- und Geschäftshäuser, ländliche Insthäuser u. a. m.
218	**Kohn,** Albert, M., Zinten, Heiligenbeil. Maurermeister in Zinten.
219	**Kolbun,** Paul, gut b., Z., Königsberg Pr. Architekt bei der Stadtverwaltung in Berlin. 7 Semester Hochschule Charlottenburg als Hörer im Hoch- und Ingenieurbau, 5 Jahre bei der Firma Sandmann, davon 1 Jahr als Bureauchef tätig, zur Hauptsache mit Entwurfsarbeiten großer Bauten (2 Lungenheilstätten und Fabrikanlagen) beschäftigt. Dann Architekt bei der Hochbauabteilung in Berlin, bei Entwurfsarbeiten und Bauleitung städtischer industrieller Bauten, ferner im Fabrikbauatelier des Baumeisters Tropp-Berlin, und als Bureauchef bei Architekt und Professor Lahrs für die Projektbearbeitung des Neubaues der Kgl. Kunstakademie in Königsberg. Später Geschäftsführer im Architekturbureau und Baugeschäft des Regierungsbaumeisters Lukas, Berlin-Feldberg i. Meckl.bg. beim Bau und Entwurf von Landhäusern, Arbeiterwohnhäusern, Bebauungsplan, Grabdenkmälern usw. tätig. Kurze Zeit mit Architekt Dullo-Berlin zusammen selbständig (Entwurf eines Jagdschlosses in der Lüneburger Heide), Objekt 700 000 M., dann wieder bei der Stadtverwaltung Berlin in der Tiefbauabteilung beschäftigt, zuletzt Entwurf und Bauleitung der landwirtschaftlichen Erziehungsanstalt in Strumshof bei Berlin, Obj. 1 500 000 Mark. Zurzeit Unteroffizier beim Verkehrsoffizier vom Platz, Königsberg.
220	**Kucklan,** Paul, M., Allenstein. Postbausekretär in Gumbinnen.
221	**Langkatt,** Willy, M., Johannisburg. Schneidemühlenbesitzer und Inhaber eines Baugeschäfts in Johannisburg, Mühlenstr. 2. Arbeitet zuerst als technischer Hilfsarbeiter beim Hochbauamt in Johannisburg, seit 1905 selbständig. Baut außer verschiedenen kleinen Bauten das Kreiskrankenhaus in Johannisburg.
222	**Lemke,** Max, M., Saalfeld, Mohrungen. Kaiserl. Werft in Kiel.
223	**Libuda,** Wilhelm, M., Gr.-Tauersee, Neidenburg.
224	**Pauls,** Bodo, M., Pr.-Rosengarth, Marienburg, Westpr. Regierungs-Bausekretär, zuletzt Vorstand des Baubureaus in Duala in Kamerun. Zurzeit Tilsit Jägerstraße 18. Seit 1. 4. 1906 angestellt. Arbeitet in Deutschland an verschiedenen ländlichen und städtischen Staatsbauten in Kamerun, auch an Brücken und Wegen.
225	**Pilzecker,** Fritz, M., Königsberg Pr.
226	**Ruhnau,** Paul, M., Königsberg Pr., †.
227	**Schlenger,** Willy, gut b., Z., Gumbinnen. Architekt in Königsberg, Wallenrotstr. 47. Arbeitet zuerst an der Entwurfsbearbeitung der Straßenbahnhochbauten in Kbg. dann 5 Jahre bei Lauffer-Kbg. als Geschäftsführer: Pfahlrostgründung der Gasanstalt und des Elektrizitätswerks. Entwurf und Bauleitung des Katharinenklosters in Braunsberg, Waisenhaus in Szibben, Kaimauer an der Grünen Brücke. Seit sechs Jahren technischer Aufsichtsbeamter der Baugewerks-Berufsgenossenschaft. Seit 1912 selbständig. Führt eine große Zahl Wohn-, Geschäftshäuser und Villen aus. Erhält von der Handwerkskammer die goldene Medaille für die Meisterschule in Gumbinnen. Seit 1915 Mitglied der Meisterprüfungskommission der Handwerkskammer, außerdem mit 15 Ehrenämtern betraut.
228	**Schütz,** Julius, M., Königsberg Pr. Kgl. Bahnmeister in Schneidemühl, Bahnhofstr. 72. Seit 1. 2. 08 angestellt.
229	**Seelmann,** Paul, Z., Heide, Ditmarschen.
230	**Simoleit,** Karl, gut b., Z., Mangarben, Insterburg.
231	**Stiefler,** Rudolf, vorzügl. b., M., Königsberg Pr.
232	**Suttis,** Johann, M. u. Z., Schloß Ermes, Rußland.
233	**Taut,** Bruno, vorzügl. b., M., Königsberg Pr. Arch. B. d. A. Berlin W. (i. Fa. Gebr. Taut u. Hoffmann, Linkstr. 20). Ergänzte seine Ausbildung durch jahrelange Tätigkeit in Musterateliers bei Bruno Möring-Berlin und Th. Fischer in Stuttgart, sowie durch Hochschulstudium. Erfolge in bedeutenden Wettbewerben in Architektur und städtebaulichen Aufgaben. Als selbständiger Architekt führte er eine Reihe bedeutender Bauanlagen aus, u. a. das bekannte „Monument des Eisens" auf der Leipziger Bausachausstellung, sowie eine umfangreiche Kleinwohnungssiedlung bei Grünau bei Berlin und anderes mehr.
234	**Tiesler,** Kurt, M., Königsberg Pr. Technischer Oberbahnassistent in Kbg., Ausfalltorstr. Nr. 28, II. Arbeitet bei den Firmen George-Pr.-Holland, Meyrahn-Trutenau, an verschiedenen städtischen und ländlichen Bauten. Seit 1904 als Bauassistent bei

19

図９　1901 年３月の合格者一覧、タウトは 233 番（囲み枠、筆者による）ケーニヒスベルク建築職学校 25 周年記念誌、19 ページ、ベルリン州立図書館、Public Domain.

（4）王立建築職学校の卒業後

建築職学校卒業後は、1902年にハンブルク近郊アルトナのフリッツ・ノイゲバウアー（Fritz Neugebauer）とウィースバーデンのフランツ・ファブリ（Franz Fabry）の建築事務所で助手として働いた。なぜハンブルクやウィースバーデンに行ったのかは知られていないが、いずれも「煉瓦」中世主義が盛んだった場所なので、煉瓦建築の可能性を模索するために選んだのかもしれない。

1903年には、ベルリンのブルーノ・メーリングの事務所に入った。メーリングは、新建材である鉄による大架構、あるいは鉄と石を結ぶ新建築方法の、ベルリンにおける第1人者として知られており、当時世界的に流行していた博覧会用のパビリオンで、エフェメラルなモニュメントを多数手がけた。タウトは、1904年に開かれるアメリカ、セント・ルイスの万国博覧会に出品する建築の設計に協力している[41]。メーリングはケーニヒスベルク出身者で、ケーニヒスベルクの建築職学校に教えた縁があったとされるが、このことは記念誌の記録からは確認されない。

メーリングは、タウトにユーゲントシュティールを紹介し、自身もおこなっていたようなパステルを用いた風景画や色彩研究をすすめた。またメーリング事務所の所員であり、同窓生でもあったマルテンスは、週末になるとしばしばベルリン郊外の自然豊かなコリーン湖畔にタウトを誘った。そこは若い画家たちのたまり場になっていて、タウトは数多くの風景スケッチを残している。湖畔には、スケッチの主題にもなったシトー会修道院の廃墟があり、そこで宿屋兼酒場を営んでいたヴォルガスト家の娘ヘートヴィヒ（Hedwig Wollgast, 1879-1968）と恋に落ちて、シュトゥットガルトのフィッシャーの事務所に移った後、1906年に結婚した[42]。

ベルリン郊外に数ある湖の中で、なぜコリーン湖畔に芸術家が集い、ヴォルガストの酒場には芸術雑誌が置かれていたのかを探るために19世紀の歴史を振り返るとき、それが決して偶然ではなかったことがわかる。そこにはコリーンの修道院址の保護に情熱を注いだ建築家シンケル（Karl Friedrich Schinkel, 1781-1841）の姿があるためである。ここではシンケルの生涯から、修道院廃墟の保護を求めるにいたった背景を探り、シンケルの「煉瓦」ゴシックに対する美意識が、煉瓦に対するタウトの意識の契機になった可能性を論じる。

41）蔵田 1942, 17-19：展覧会図録 1994, 76.

42）長谷川 1994, 42-58.

3　シンケルの半生とネオ・ゴシックの関係[43)]

カール・フリードリヒ・シンケルは、ベルリンの北およそ60キロメートルのところに位置する古都市ノイルピーンの、教会広場に面した副説教師の館で、1781年3月13日に福音派聖職者ヨーハン・クリストフ（Johann Christoph）・シンケルと商人の娘ドロテア・ローゼ（Dorothea Rose）の間にできた子供5人の内3番目の子として生まれた。子供時代には、姉たちが脚本を書き、カールが紙製の人形を切り抜いて色を塗り、家族で紙芝居を楽しんだという平穏な子供時代が伝えられる。このエピソードは後に、ロマン主義的な『魔笛』の舞台装置や、火山の爆発や空中庭園を題材としたパノラマのデザイナーとしての、シンケルのデヴュー[44)]を彩ることになる。

幼い頃の平穏は、1787年8月26日日曜日に起った大火と、それに起因する父の死によって灰燼に帰した。6歳から14歳まで市立ギムナジウムに通う間、フリードリヒ・ヴィルヘルム2世（Friedrich Wilhelm II, 1744-97, 在位：1786-97）の援助による、市の再建を目の当たりにした。1794年にベルリンの伝道者未亡人施設に移りすみ、一歳年下の弟と父の友人が学校長を務めるグラウエン修道院附属ギムナジウムに通うが、97年には弟が他界した。その喪失感を埋めるために素描に没頭したと言われ、人物頭部や、建物やカリカチュアを描いた15歳のスケッチブックが残されている。

1790年頃のヨーロッパで、建築への野心がある学生にとって、プロイセンの首都ベルリンほど多くのものを提供できる場所はなかったと言われる。フリードリヒ・ヴィルヘルム2世やその息子3世（1770-1840, 在位：1797-1840）は、創造豊かな素質を求め、芸術や学問・文化的活動を支援した。

1797年シンケルは、アカデミーで開催された建築家フリードリヒ・ジリー（Friedrich Gilly, 1772-1800）の展覧会で、フリードリヒ大王の記念碑のための空想的な設計図[45)]に触れた。その形態力に圧倒されて、進むべき方向を意識したと言われる。周囲からは商人や醸造職人の道をすすめられたが、彼は上級学年にすすむことを放棄し、ノイルピーンの市長ダニエル・ネールデッヘン（Daniel Nöldechen, 1736-99）の紹介で、フリードリヒの父、枢密上級建築顧問ダヴィッド・ジリー（David Gilly, 1748-1808）に弟子入りした。

シンケルは、住み込みでダヴィッドの工房に所属し、2人の優れた建築家の指導下で仕事を

43）以下の叙述は、Piethe 2019, 19-36; Siedler 2019とくにLissok 2019, 10-19に基づく。

44）鈴木 1998, 305.

45）鈴木 1998, 305（図189）.

始め、素描の基礎を学び、師の収集作品を素描で模写した。1799 年彼はデヴィッド・ジリーが基礎づけた王立の建築教育機関であるベルリン建築アカデミーに入学し、フリードリヒの個人的な建築家サークルに参加した。ジリーたちは、ネオ・ゴシック的美学を形作るため煉瓦建築に対する感性を育みながら、「幻視の建築家」と言われたフランスの革命期建築家クロード・ニコラ・ルドゥー（Claude-Nicolas Ledoux, 1736-1806）や、新古典主義建築を代表するジャン・ニコラ・ルイ・デュラン（Jean-Nicolas-Louis Durand, 1760-1834）の理念を伝えた。鈴木によれば、ジリーの建築スケッチからは、「（煉瓦建築の）組積造に基づく構造原理を用いている」とはいうものの、「20 世紀初頭の近代建築といってもよいほどの構造的明快さ」が現れており、「ロマン主義的古典主義と呼ばれる当時の雰囲気」が感じられる[46]。

1800 年に敬愛するフリードリヒが結核で没した。シンケルは、デヴィッドの斡旋でフリードリヒの建築計画を引き継ぐことになった。いくつかの大事業をこなした後、1803 年から 5 年にかけて 2 年間のヨーロッパ研究旅行が認められ、パリ、ドレスデン、プラハ、ウィーン、ヴェネツィア、ローマ、シシリーを訪問した。ローマではヴィルヘルム・フォン・フムボルト（Wilhelm von Humboldt, 1767-1835）と知り合い、その後友人にして注文主として親交を続けることになる。

シンケルの手紙や日記からわかるように、彼はイタリアの芸術品を研究し、土地や人を観察した。1804 年にメッシーナ、パレルモ、パルティニコでシンケルが制作したスケッチをみたゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832）は、「驚くべき偉大さ」と呼んだという逸話が残されている。シンケルは都市や風景を描き、古代の建築を研究し、古典主義に対する独自の考えを発達させた。同時に彼は古代後期の折衷的な建築や初期イタリアの中世建築にも関心を向けるロマン主義的関心も強めていた。

ゼルケルによれば、すべての建築の根本原理である合目的性を、シンケルは三つの視点から規定した。すなわち空間配置もしくは計画案、構造あるいは計画に相応しい素材結合、そして装飾あるいは美化の合目的性である。イタリアからの書簡や素描からは、彼が見た建築について特に素材と構造、それに必要だった作業機械に関心を向けていたことがわかる。さらにベルリン建築アカデミーでは、煉瓦の美しさとその利用法を理論的且つ実践的に示してみせ、煉瓦と粗煉瓦建築の復権に力を貸した[47]。

シンケルは帰還後もさらに画家としての活動を続けた。というのも、1806 年のナポレオン戦争に敗れた後、プロイセンの建築活動は中断に追い込まれたからである。

46）同上.

47）ゼルケル 2003, 28-29.

図 10　シンケル《水辺のゴシック教会》80 X 106.5 cm、油彩、1813 年、ベルリン、国立古美術館、Public Domain.　ケルン大聖堂に触発されたイメージだと考えられる。

1809 年に商人の娘シュザンヌ・ベルガー（Susanne Berger）と結婚し、一男三女をもうけた。翌年 5 月、ベルリンで新たに創設された建築管理代行機関（Baudeputation）の試補に任命。独自の古典主義的様式で建築活動を続ける一方で、同年、若くして没した王女ルイーゼのために、グランゼー湖畔にゴシック様式で記念碑を建設した[48]。1811 年以来ベルリンの王立芸術アカデミーの正規メンバーであるとともに、ナポレオン失脚後のプロイセンで、1815 年には上級建築顧問となり、文化財保護のための提言をおこない、ゴシック様式は祖国の理想的な建築様式であることを訴えた。翌 1816 年に、国王フリードリヒ・ヴィルヘルム 3 世は文化財保護の観点から、シンケルにケルン大聖堂（カトリック）の増築案を命じた［図 10］。

コリーンの旧シトー会修道院の保護に取り組むのは 1817 年からのことで、マルク・ブランデンブルク地方ではじめて、保存すべきゴシック建築の例として注目された。「建築芸術の財宝は本来の場所に、自然な環境のなかにそのまま置いておき、首都の博物館に集中させないこと」[49]を要求した彼の活動が、タウトに中世の煉瓦建築の美を意識させる契機となったのである。

48）堀内 1984, 2805-06.
49）ゼルケル 2003, 30.

図 11　旧コリーン修道院教会、東南からの景観、2009 年、©Ralf Roletschek

4　コリーンの旧シトー会修道院と煉瓦[50)]

(1) コリーンの旧シトー会修道院の変遷

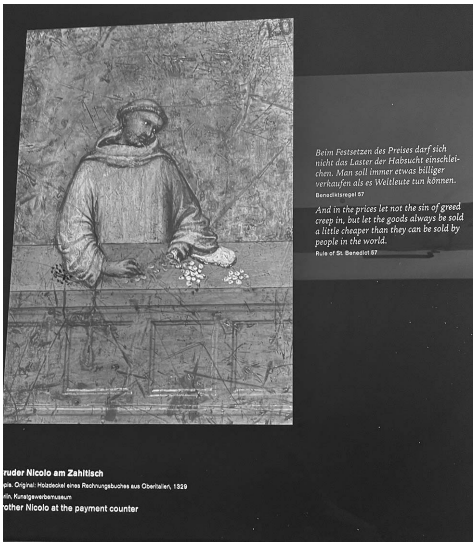

図 12　修道士の経済活動を示す展示物（ヨーロッパ各地から）、1329 年の上部イタリアの会計簿の挿絵、旧コリーン修道院、筆者撮影.

コリーンの旧シトー会修道院（以下、旧修道院とする）の来歴について、いくつかの文書から確認されるように、その建設は 1231 年にブランデンブルク家のヨハネスとオットー両辺境伯によってすすめられた。この地域のキリスト教化は必ずしもうまくいっておらず、近くにいた異教徒スラヴ民族から住民を保護するために、修道院建設用の土地を司祭に譲渡したのである。同年建設された修道院は聖母に献堂され［図 11］、プレモントレ会修道士たちに管理された。教皇グレゴリウス 9 世の認可は 1234 年だったため、修道院創設は一般に同年だとされている。その後修道院の管理はシトー会に移った。おそらく

50）以下の叙述は、Brecht 2018; Wagner 2016 a に基づく。

13 世紀の傾向として確認されるように、熱心に規則正しく働き、荒れた土地の開墾に取り組んだシトー会の方が住民に支持されたものと思われる[51]。現在博物館になっている修道院内部には、シトー会がすすめた信仰生活ばかりでなく、社会的経済的活動の痕跡が展示されている［図 12］。

宗教改革に伴うコリーンの世俗（非カトリック）化は、1543 年あるいは少なくともその前になされた。三十年戦争中の 1635 年から 37 年にかけて、および、スウェーデン侵攻時にコリーンとその周辺一帯はかなり被災した。そのため 80 年には、新しい耕作者に開墾のための土地が与えられた。1706 年には、教会のすべての遺跡と、狩猟を除く権利が戦争負傷者に割り振られたが、21 年の閣議決定で王室の管理下に入った。

その後地域の経済活動に組み入れられて、教会の南側廊の欠落部には、種馬 6 頭の馬小屋が作られ、内陣周辺には羊小屋がおかれ、その周囲は球技場として使われた。その他修道院ホールは醸造所や蒸留所として使われ、製油所や穀物庫として使われることもあった。

（2）ロマン主義的対象としての修道院と煉瓦

以上のように旧修道院は、忘れられていたというより、長い間その文化的価値に基づいてみられることがなかった。しかしながら、戦争が終結し自然の景観に対する新たな感性が育まれるようになると、修道院の廃墟に風雨を凌ぐ以上の価値が認められるようになる。すでに 18 世紀末からさまざまな旅行記の中に、旧修道院を称賛する言葉が見いだされる。1794 年 4 月、プロイセン王室の管理下にあったコリーンの建築視察旅行に際して、プロイセンの大臣オットー・フォン・フォシュ（Otto von Voß, 1755-1823）は、この古い建造物はできるだけ保存するべきであるという言葉を残している。当時、借地人であったヴィルヘルム・ノッペ（Wilhelm Noppe）により、旧修道院の内部は堆肥小屋や家畜小屋として用いられていた。その現状を憂いた大臣は、この状態を変える可能性を打診したのである。

少し後の 1797 年、将来シンケルの師となる枢密上級建築顧問のダヴィッド・ジリーが息子フリードリヒを連れてコリーンを訪れた。後に彼はその著作に、コリーンの見事なゴシック建築と心地よい風景のことを書きしるしている。

当時旧修道院の近くに、ベルリンやポツダムとバルト海からの入り江に面したシュテティーン（ポーランド名、シュチェチン）を往来する馬車路線の駅があった。ここでは馬の蹄鉄を交換するため停留時間が長く、その傍にある宿屋兼「古修道院居酒屋」で過ごす旅人が、旧修道

51）Christiansen 1997; Wagner 2016 b, 9-18.

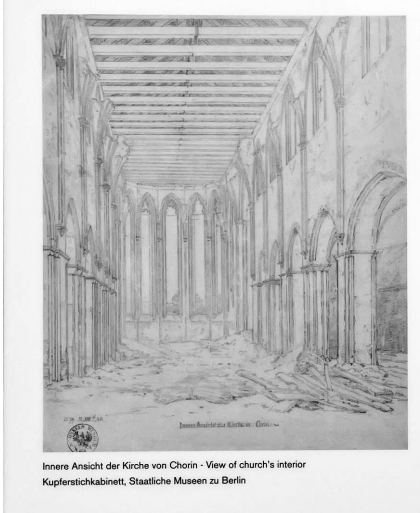

図13　シンケルの素描（教会の内陣、1816年頃）の展示物、旧コリーン修道院、筆者撮影.

院に目を留めている。しかしながら実際に意識的に注目したのは、上述のように1817年のシンケルが最初だった[52]。

シンケルは遅くとも1810年以来定期的にコリーン駅に来ていた。300年近く地方経済に役立てられていた旧修道院の廃墟を「発見」した。彼はまずスケッチをして、崩壊の具合を記録し、それからコリーン修道院の救出のための確実な提案をおこなった。シンケルが描いた《コリーンの教会の内部》の素描［図13］で、彼は屋根もなく馬小屋として用いられていた教会と地面の藁を描いている。

1810年から、プロイセンの王室管理下の建造物維持に経費を捻出する提言を任務としていたシンケルは、旧修道院に屋根をつけ、修復をすすめるために、1816年12月8日に当時のコリーン修道院の現状を書いた報告［図14］をだし、翌年1月8日には修復のための設計図を作成した。彼の提言にしたがって、ノッペは同月28日に豚を移動させたが、修復が実現したのは1831年のことである[53]。

コリーンではすべての建物が煉瓦造である。内部の煉瓦は薄く着色［図15］されていて、ところどころに塗り残しもあるが、昆虫や落ち葉が石灰に埋もれている部分もある。石灰漆喰は、一部13世紀の最初の工事で使われたものが残っている［図16］。煉瓦の色は濃い赤色だが、教会の南側ファサードには、黄色がかった煉瓦が用いられている。ほとんどの煉瓦は長さ25.4センチ、幅7.6センチ、高さ11.4センチで、煉瓦に残された文字や楽譜が［図17］[54]その古色と戯れて独特の美を生みだしている。約半世紀後にタウトをはじめとした若い芸術家たちを魅了したのは、数世紀を生きのびた組積造の明快さに加えて、年月が醸成した素材が五感に訴える色彩や感触だったのではないだろうか。

52）Wagner 2019, 30-39.
53）Siedler 2019 b, 24-29.
54）Behrendt 2016 a, 49-50; Behrendt 2016 b, 51-52; Perger 2016, 19-36; Raue 2016, 37-48.

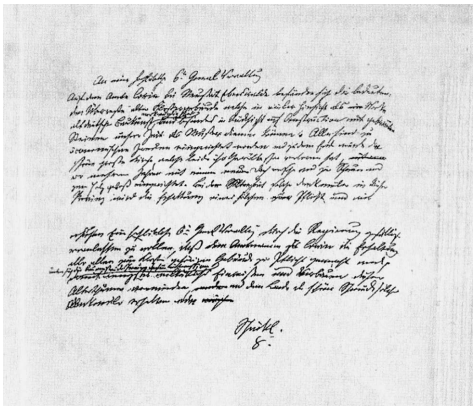

図 14　シンケルが 1816 年 12 月 8 日に財務省の管理部門に宛てた報告の草稿の展示物．筆者撮影．

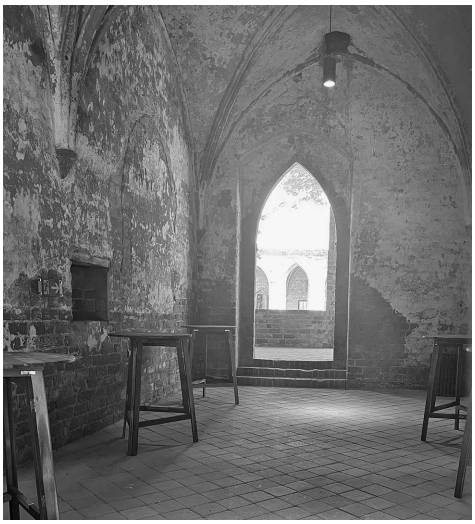

図 15　旧コリーン修道院の図 16 のさらに南西にある別棟内部．台所として用いられた。薄い漆喰が塗られている。筆者撮影。

図 16　旧コリーン修道院のかつての主要門、現在は側門。古い煉瓦が残っている。複合体の南西に位置する。筆者撮影．

図 17　旧コリーン修道院教会、南袖郎外側の高所西窓、北アーチの内側、断片あるいは裁断された煉瓦。Wagner 2016 a, 58.

結びに代えて・・タウトと煉瓦の意識化

タウトがコリーンに通っていたことは、同地で制作した数多くのパステルや水彩による風景画との関係で語られるが、旧修道院も描いているので［図 18］、シンケルがこの場所に注いだ情熱を知らなかったとは考えにくい[55]。焼成によって微妙に色を変える中世の煉瓦に、大量生産による近代の煉瓦とは異なる、ケーニヒスベルク特産の琥珀にも似た造化の不思議を感じたのではないだろうか。

タウトの妻ヘートヴィヒの実家ヴォルガスト家は、宿屋兼「古修道院居酒屋」を営み、馬車駅で交換する馬の蹄鉄を鋳造する仕事もおこなっていた。後にタウトは馬蹄形のジートルング［図 19］を設計したが、その発想の元に、当時はすでに関係が悪化していた妻との思い出があったことを語っている。

本稿では、タウトが煉瓦に注目するようになった初期の契機を掘りさげることをめざした。中世の煉瓦と近代の鉄やガラスが同居する故郷の情景、手工業ギルド制から近代的建築職教育制への移行期にも容易に場を譲らない煉瓦積親方の熟練、シンケルをはじめとした 19 世紀の建築家たちが中世建築に向けた情熱と新たな美の創出、これらすべてがタウトに煉瓦を意識させた契機であった。どのように意識したのかということは、今後の課題である。さらに、そもそも煉瓦はキューブであることを忘れるべきではないだろう。構成的キュビスムから発展したオルフィスムのドローネーが描くファセットは、グラス・ハウスの鉄枠のガラス［図 20］を思いおこさせる。ドローネーら現代芸術家との接触は、タウトが意識化した煉瓦を表現主義の素材へと変貌させる触媒として機能したのである。

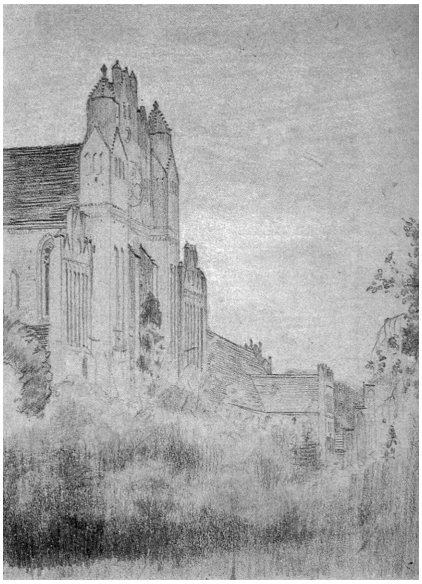

図 18　タウト《コリーンの教会》29.5×21.5 cm、鉛筆、パステル、褐色紙、1906 年、展覧会図録　1994、74.

55）タウトと共に来日したエリカ・ヴィッティヒはシンケルの子孫かもしれないという話があるが、シュパイデル教授は否定的な反応を示した。田中 2012, 29.

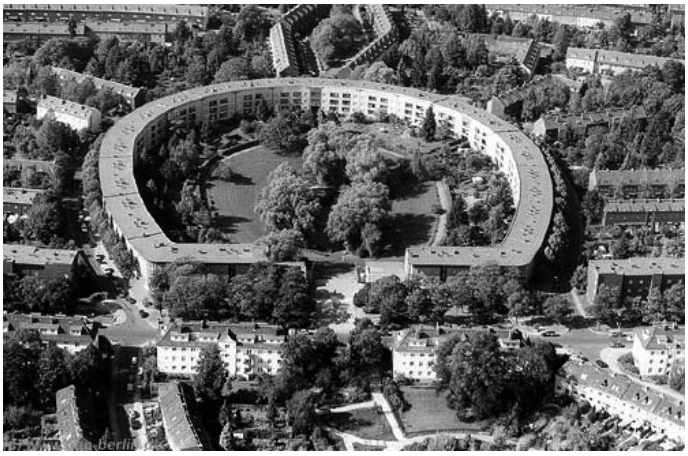

図 19　タウト《馬蹄形ジートルング・ブリッツ》1925-30 年、ベルリン、Public Domain.

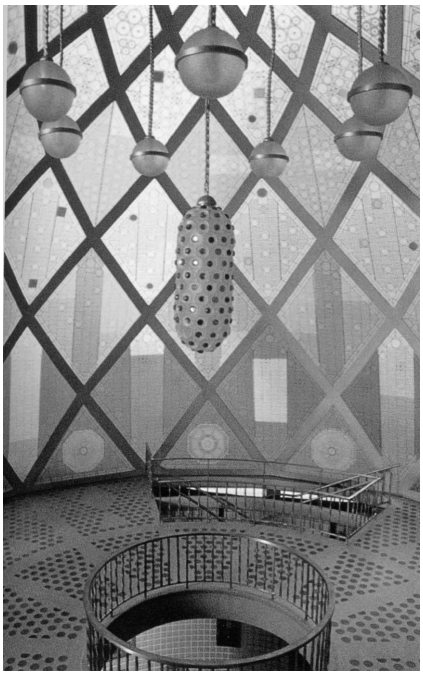

図 20　グラスハウスの復元模型、グラスティーエケッター　1994, 138.

参考文献一覧

『建築大辞典』2007. 第 2 版、彰国社.
展覧会図録. 1994『ブルーノ・タウト回顧：自然と幻想』マンフレッド・シュパイデル編.
稲野強. 2015.「オタカル 2 世」『東欧を知る事典』平凡社.
蔵田周忠. 1933.「ブルノオ・タウト」『国際建築』9(5)：193-203.
蔵田周忠. 1942.『建築新書　ブルーノ・タウト』相模書房
『〈スラヴ叙事詩〉通鑑』. 2015. 関西大学蜷川研究室翻訳. チェコ美術評論家連盟.
篠田英雄. 2008.「タウト小伝」162-178. タウト 2008 a.
鈴木博之. 1998.「新古典主義の建築」『世界美術大全集　第 19 巻　新古典主義と革命期美術』鈴木杜幾子責任編集、小学館.
ゼルゲル、ヘルマン. 2003.『建築美学』吉岡健二郎訳、中央公論美術出版.
タウト、ブルーノ. 1933.「日本の春を訪れる」17&20.『インターナショナル建築』5.
タウト、ブルーノ. 1975.『日本・タウトの日記』篠田英雄訳、岩波書店.
タウト、ブルーノ. 2008 a.『ニッポン－ヨーロッパ人の眼で見た』篠田英雄訳、春秋社.
タウト、ブルーノ. 2008 b.『日本の家屋と生活』篠田英雄訳、春秋社.
田中辰明. 2012.『ブルーノ・タウト　日本を再発見した建築家』中公新書.
ティーエケッター、アンゲリカ＆デトレフ・ザールフェルド. 1994.「「グラス・ハウス」の模型による色彩復元について」136-43. 展覧会図録 1994.
蜷川順子. 2022.「ブルーノ・タウトと色彩」『関西大学東西学術研究所紀要』55: 113-145.
長谷川章. 1994.「色彩と光－ブルーノ・タウトの絵画作品について」42-58. 展覧会図録 1994.
長谷川章. 2017.『ブルーノ・タウト研究』ブリュッケ.
深尾精一. 2022.『旅する煉瓦』鹿島出版会.
堀内正昭. 1984.「K. F. シンケルの煉瓦造建築について：建築歴史・建築意匠」2805-06.『学術講演梗概集. 計画系（59）. 日本建築学会.
渡辺克義、編著. 2020.『ポーランドの歴史を知るための 55 章』明石書店
Behrendt, Andreas. 2016 a. “Der Zisterzienserchoral-Anmerkung zum liturgischen Gesang der Zisterzienser.” 49-50. In: Wagner 2016 a.
Behrendt, Andreas. 2016 b. “Die CD ‘Klingende Steine’ -TrackJist, Texte und Übersetzungen.” 51-52. In: Wagner 2016 a.
Sieroka, Otto. 1898. *Jahresbericht, des Königlichen Gymnasiums zu Allenstein über das Schuljahr 1897 /98*. Allenstein: W. E. Harich.
Brecht, P. R. 2018. *Die Ruinen des Zisterzienster-Klosters Chorin. Eine zeichnerische Bestandsaufnahme von 1854*, Carsten Rau（Hersg.). Berlin: Barbarus Books.
Christiansen, Erik. 1997. *The Northern Crusades*. London: Penguin Books.
Eichhorn, Ulrike. 2014. *Taut & Hoffmann in Berlin*. Berlin: Edition Eichhorn.
Chihak, von. “Die Anfänge der Königl. Baugewerkschule zu Königsberg bis zur Jahr- hindertwende.” 3 -5. In: *Festschrift* 1917.
Festschrift zum 25 jährigen Bestehen der kgl. Baugewerkschule Königsberg i. Pr. 1892-1917. 1917. Königsberg［Selbstverl.］.
Kell, Major. 1917. “Erste Fortseßung: Geschichte der Schule bis zum Ausbruch des Krieges.” 6-11. In: *Festschrift* 1917.
Kokkelink, Günther. 1998. *Baukunst in Norddeutschland*: *Architektur und Kunsthandwerk der*

Hannoverschen Schule 1850-1900. Hannover: Schlüter.

Lissok, Michael. 2019. “Karl Friedrich Schinkel: Aneignung und Neudeutung der Gotik.” 10-19. In: Siedler（Hrsg）.

Perger, Mischa von. 2016. “Die Texte aus dem Choriner Backstein-Scriptorium.” 19-36. In: Wagner 2016 a.

Piethe, Marcel. 2019. “Ein »enthusiastis cher Weltverschönerer« Biographische Notizen zu Karl Friedrich Schinkel.” 2-9. In: Siedler（Hrsg）.

Programm, Nachrichten und Lehrplan der Königlichen Baugewerkschule zu Königsberg i. Pr: für d. Schuljahr 1895-1901. 1901. Königsberg: Königliche Baugewerkschule.

Raue, Jan. 2016. “Bibliothek in Backstein. Überlegungen zur Entstehung der Choriner lnschriften.” 37-48. In: Wagner 2016 a.

Roloff, Paul. 1947. *Der Maurerlehrling*. Berlin: Erich Schmidt Verlag.

Siedler, Franziska（Hrsg.）. 2019. “Schinkel in Chorin.” *Zeitschrift für die Mark und das Land Brandenburg*, Die Mark Brandenburg: Verlag für Regional-und Zeitgeschichte.

Siedler, Franziska. 2019 a. “Gotikbegeisterung als nationale Bewegung im 19. Jahrhundert.” 20-23. In: Siedler（Hrsg）.

Siedler, Franziska. 2019 b. “Schinkels Einsatz für die Bauten des ehemaligen Klosters Chorin.” 24-29. In: Siedler（Hrsg）.

Speidel, Manfred. 2013. “Taut, Bruno,” 814-17. *Neue Deutsche Biographie*. 25. https://www.deutsche-biographie.de/pnd 118621041.html#ndbcontent

Voigt, Johannes. 1832. “Ueber die Zeit des Aufbaues der Domkirche zu Königsberg.” *Preußische Provinzial-Blätter*. 7. Königsberg.

Wagner, Stefanie, Andreas Behrendt, Mischa von Perger und Jan Raue. 2016 a. *Bibliothek in Backstein-Inschriften an der Choriner Klosterkirche*. Arbeitshefte des Brandenburgischen Landesamtes für Denkmalpflege und Archäologischen Landesmuseums Nr.37. Worms: Wernersche Verlagsgesellschaft.

Wagner, Stefanie. 2016 b. “Die Choriner Klosterkirche-Botschaften aus dem Mittelalter.” 9-18. In: Wagner 2016 a.

Wagner, Stefanie. 2019. “Karl Friedrich Schinkel -ein Wegbereiter.” 30-39. In: Siedler（Hrsg）.

Zimmermann, Paul. 1904. “Haarmann, Friedrich Ludwig.” 690-92. *Allgemeine Deutsche Biographie*（*ADB*）. 49. Leipzig: Duncker & Humblot.